オタクは好きになっちゃダメッ！！～私、オタクを好きになってしまいました～

空と色

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
オタクは好きになっちゃダメッ！！～私、オタクを好きになってしまいました～

【Ｎコード】
Ｎ８３９３Ｍ

【作者名】
空と色

【あらすじ】
オタクを好きになった主人公の恋愛話。でも、最終的に主人公が戦ってるのは二次元ではなくなってしまいます（苦笑）

1．二次元との戦い。

私は、オタクは好きになってはいけないと今更ながらに痛感している。
だけど……もう遅かった。
もう、好きになってしまってから分かっても、なんの意味も……無い。
カラカラ音をたてていく心の中で、一人立ちすくんでる感じ……何これ？何これ？何でこんなにむなしいの？
わけわかん……な……。
……泣きたい……なんて……。
私は別にオタクじゃない。特別何が好きってわけでもない。
ただ頭の悪く、スポーツも出来ないなんも出来ない女子だ。
ただ、ひょんなことから藤堂（とうどう）の話を聞かなくちゃいけないことになって、いつからか私はアニメやゲーム、キャラについて熱心に語る藤堂（とうどう）を好きになってしまっていた。
でも、分かってるコイツが私なんかを見てはくれないこと。
コイツがすきなのは二次元であって、三次元？ではない。（現実って四次元だっけ？あんまそこらへんわかんないんだよな、私バカだからさ？自分で言ってむなしいとか……笑うしかない。）
ゲームの中の完璧な女の子にボロ丸出しのリアル女が勝てるわけない。
そう、勝てるとしたら……それは……それは……身体……とか、性的欲求……とかくらいしか……。
ああ！私は何を考えてるの！！
激しく頭を振っていたら後ろから藤堂（あいつ）の声がした。
「何してんだよ、藤崎（ふじさき）、それじゃもともとない頭がパーになるだろ、パーに。」
「パーじゃない！この万年キモオタク！！」

「なんだと！？」
「本当のことじゃん！！」
藤堂、藤崎。名前の始まりの漢字は同じなのに、席は離れてしまった。
そんなことをくよくよ思ってる私って、どこの乙女なんだろうって最近自分でも思う。
分かってる。言わないで。
分かってるから。
正直、私って……キモイよね。
私がこんな可愛げない態度をとるのは、ツンデレとかいうのを狙ってるからじゃなくて、藤堂（こいつ）を恋愛対象として見てしまっている気持ち悪い私でも、少しでもいいからこいつの友達としてでいいから、そばにいたいから。
好きじゃないふりをするの。
この気持ちは言うつもりは無い……ないけど、きっと私が言わなきゃこいつは私の気持ちなんてきっと気づかないんだろうな……。
ああ、なんだかすごく、腹が立ってきた……。
「っ～……この、にぶちんキモオタク！！」
「はぁ！？なんなんだよさっきっから！？」
そりゃ、藤堂はすごく顔が良い訳でもないし、スポーツが出来るわけでもない。
頭はすごくいいけど……。
「や～ラブ〇ラスは人生だよ。しかも知ってるか！？ラブ〇ラス〇ラスが発売なんだぜ！！」
来た……またラブ〇ラス……。
「キモオタ……。」
「なんと言われようが関係ない！！やっぱねねタンいいよ！ねねタン最高だよ！！」
「鼻の下伸びてる。」
「うっさいな、イヤなら聞かなきゃいいだろ。」

私はウグッと言って押し黙った。
どうやらねねタンと藤堂が読んでいるのは〇ヶ崎　寧々というキャラクターらしく、年上でおっとりキャラらしいのだ。
私はね、藤堂の話を聞くのが嫌いなんなんじゃないんだよ。
だって、そーゆー話してる藤堂って、すごく本当に楽しそうな笑顔見せるから。
こーゆーのって女子の中なら私だけしか知らないのかなって考えると嬉しくて、変な気持ちになるんだよ。
だから話して欲しい。私だけに聞かせて欲しい。
知ってるよ。
本当はこーゆーの独占欲って言うんだよね？でも、仕方ないでしょ。好きなんだもん。

2．臆病な自分。

絶対にこの気持ちを伝えて困らせたりしないから、友達として出いいから……そばにいて、少しぐらい独占欲、出してもいいよね？
って、やっぱ気持ち悪いか……私。
あぁ、どうして二次元と現実はこんなに違うの？
女の子の可愛いシーンだけ集めた失態のない完璧な女の子に、こんなボロばっかで可愛くないリアルの女の子が勝てるわけないのに……。
それに私、知ってるんだよ。
恋愛ゲームちょっと覗いたの。
そしたら私と思ってることが同じだったシーンもいくつかあった。
（ラブ〇ラスじゃないけど。）
それってさ？気持ちを素直に言えるから、相手に素直に伝わるから、二次元がいいの？
三次元じゃ、捻じ曲がっちゃうし、素直になれないし、ギクシャクしちゃうから、リアルじゃ、ダメなの？
教えてよ……。
「藤堂……。」
「んぁ？」
「二次元の子、やっぱりかわいい？」
「あったりまえだろ！俺のことバカにしてくる女子もいないし、みんな可愛いし、素直だし、一途だし！！」
ねぇ、一途なだけじゃダメ？と喉まででかかった言葉を飲み込むと、私は頷いた。
「そうだよね。でも藤堂ってそんなにリアル女子嫌いなの？」
「基本的には好きじゃないね。」
「あのさ、私女子なんだけど。それって藤堂には私が女子には見えてないってこと？」

顔を引きつらせながら聞くと、藤堂はあたしを見た。
思わず驚いて声を上げそうになった。
「ん～……藤崎は俺のこと避けたりしないからな。嫌いじゃないよ。」
笑顔でそう言われて、思わず赤面した顔を下に向けた。
「そ、そう。」
我ながら気持ち悪い反応をしたと思う。
でもきっと藤堂だからばれないって信じてる。
「あ～○ラス○ラス欲しいわ……二人きりでお泊まり、手握るとか、ロマンだろ！？もう！！」
「それって、下心丸出しってことじゃないの？」
「な！何言ってんだよバカ！そりゃ、ちょっとはあるかもしんないけど、純粋にお泊まりだろ！」
ふ～ん？じゃあ藤堂が誰かちょっとでも気になる女の子と一緒に泊まりに行ったら、そーゆーことするの？
「藤堂ってさ、リアル女には興味ないんだよね？」
「まったくって訳じゃないが、あんまりないな。何で？」
「いや、手握られて“まだこうしていたい……”とか言われるの望んでるのかなぁって。そんで下心とか満々で襲っちゃったりするのかと……。」
私が苦笑すると藤堂が怒った。
「だからどうしてそう人の純粋な気持ちを下心込みで構成させるか！って、あれ？俺、ラブ○ラス○ラスについてそんな台詞まで詳しく言ったっけ？」
その瞬間に私はしまった！と思った。
だって、好きな人のこと、少しでも知りたいって思うのは当然のことでしょ？私だけじゃないはず。
だから少し調べてみたの。
そしたら……出てきて……。
キーンコーンカーンコーン。

いい感じに学校のチャイムが鳴った。
「ま、いいや。じゃ、またな。」
「うん。」
“またな”些細なことなのに心に残る。
わかってる。気持ち悪い。
だけど……どうしようもないんだもん。
可愛くないよね……本当に私……。
ため息をついたら先生が「ためいきつくなよ〜。」だって。
可愛くなれるならなりたい。
でも、二次元にリアルはかなわない。
だから怖い。
怖いの……臆病な私を許してね。
ああでも、許すも何もないよね……。

3．ライバル出現！？

そしてお昼時間。
「きゃっ！！」
廊下を歩いてる途中に誰かがこけた。
天然そうな女の子だった。
なんか、ぼけっとしてるな～って言うのが私の感想だった。
「だ、大丈夫？」
「あ、はい、ごめんなさい。あの、藤堂くんってこのクラスですよね？」
いきなり藤堂が出来てきて私の心臓が音をたてた。
「あ、うん。そうだけどあのキモオタに何か？」
「私、実はアニメーション部部長で、少し藤堂くんにお話が合ったんです。でも、いないようでしたら私……。」
アニメーション部？部長？この、ちょっととろそうなのが……？
「あ～！！時夜（ときや）さん！」
「藤堂？」
いきなり後ろから声が聞こえて振り返ると、そこには私の目の前に居る女子を見て大きく目を見開いている藤堂がいた。
「藤堂くん！ごめんね。あの、アニメーション部のことなんだけど、藤堂くんってけい○ん！も好きだったよね？」
「ああうん、好きだよ？それがどうかしたの？」
私はその光景を見て、胸が苦しくなった。
な……に、これ？
リアル女は嫌いなんじゃなかったの？
それ以前に藤堂はいつこの子と仲良くなってたの？
藤堂の笑顔とか、知ってるのは私だけじゃ、なかったってこと？

「あのね、コマ送りとかよく分かってるかなって！この前もＯＰのコマわりが……とかなんか言ってたでしょう？良かったら少し出来たやつ見てってほしいの。藤堂くんにアドバイスもらうと、すごくスムーズになるから！あ、忙しかったらいいんだ、迷惑じゃなければ……なんだけど……。」
やめて……そんな上目遣いで藤堂を見ないで！！
「迷惑なんかじゃないよ、俺も結構楽しみにしてるし。」
藤堂が笑顔を見せた。
普段私に見せるような意地悪な笑顔じゃなくて、優しい笑顔だった。
「本当！？ありがとう！みんなも言ってるの。今回のは力作だねって！ニコ〇コで投稿しても大丈夫じゃないかって！上手すぎて荒れるとかあるかもしれないねって！！」
二人の会話がどんどん遠くになる。
私はもう何も考えられなくなった。
ええ？何が起こってるの？
わかんない……分かりたくない。
だって、信じたくない……。
信じたく……ない……。
「おい、おい？藤崎？何ボーっとしてんだよ？」
いきなり真横から声がしてはっとした。
「あ、ぅ……藤堂？」
「俺以外に誰がいると？」
「あ、や、ごめ……。」
「何か変だぞ？どうかしたのか？」
「あの、女の子にいつあったの？」
「ん、まぁちょっとあってな。いろいろあって意気投合したんだよ。」
そう言って私に笑って見せるから、私の胸はさらに苦しくなる。
「藤堂、あのコがすきなの？」
「は？何言ってんだよ？お前、頭でも打ったのか？それも強度に。」

本当に訳わかんなそうな顔をしてる藤堂にほっとした。
「強度にとは失礼な。でも……そうだよね。リアル女に興味のない藤堂があの子のこと好きになるわけないか！」
「……それ、怒るところか？」
「何？別に事実を言っただけじゃん。」
「藤崎、てめぇ……。」
でも、不安なのは変わらなかった。
藤堂があのコを好きじゃなかったとしてもあの子は分からない。
なにより、藤堂がすきそうな純情そうなタイプだった。
おっとりしてて、純粋そうで、一途そうな女の子……。
私とは違うタイプの女の子……。
私はひねくれてしまうことが多すぎて……。
「ねぇ、藤堂。」
「あ？」
「そのアニメーション部、私も行っちゃダメかな？」
「俺はいいけど、むこうはどうかな……つか、どうしたんだ？」
「べつに？アニメーションってどうやって作るのかなってちょっと興味あるからさ。」
「ふ～ん。」
そう言って藤堂はどっかに行ってしまった。
そしてアニメーション部にもお邪魔し、何事もなくその日を終えると、数日が経過した。
そしてある日、あたしは結構仲良くなったのではないかと思う時夜さんに思い切って聞いてみた。
「時夜さん？」
「なぁに？」
「あの、さ？時夜さんって藤堂がすきなの？」
「好きだよ？」
彼女がゴク当たり前のことみたいに言ったことに私は驚き、戸惑った。

「え？恋愛対象として？」

4．アイツの元気。

「それは……わからないけど……でも、藤堂君のことは確かに好きで……それが、恋愛的な意味なのかと聞かれるとなんとも言えないの……。」
聞いてはいけないことを聞いてしまったと思った。
私が聞いてしまったことで彼女の中の好きが、恋愛に変わることが怖い。
私はいつもおびえてばっかりだ。
藤堂のそばにいたいから、そばに入れなくなることが怖い。
藤堂に彼女が出来ることが怖い。
時夜さんがそばにいることで、二人が意識するようになることが怖い……。
「やめときなよ、あんなの！」
私がげらげら笑って言ったら時夜さんは不思議そうな顔をした。
「藤崎さんは藤堂君のこと、好きなの？」
「……好きじゃないよ……それより私のことはレイでいいよ！私の名前、藤崎　レイって言うから！」
「え……？あ……うん、じゃあ私はアズサで……私の名前ね、時夜　アズサって言うの。」
その瞬間私はフリーズした。
確かアズサって名前のキャラクターがけい○ん！にいたはずだ。
そしてそのキャラが藤堂は好きだった。
「え？えぇ？アズサって……。」
私があたふたしていると時夜さんは私が言いたいことが分かったらしく、静かに頷いてから微笑んだ。
「けい○ん！にもいるよ。アズサって子。確か、藤堂君のお気に入りだったよね。私はむぎちゃんも結構好きなんだけど。」
「え？アズサ？むぎちゃん？」

「あ、ごめんなさい！藤崎さ……じゃない……レイにはよく分からないよね！そんなに詳しくないんだもんね！藤堂君も私の名前聞いたとき驚いてたよ。」
そういってアズサは優しく微笑んだ。
アズサ……藤堂が好きなのはあずにゃんっていうキャラ……。
アズサ……おっとり系で、天然の、藤堂の好きなタイプの女の子……。
時夜　アズサ……藤堂と同じ、“と”から始まる名前。
アズサ……ずるい……女の私でさえ女の子らしくて可愛い子だと思うのに……。
気がつくと私は家のベッドの上で一人、うずくまりながら枕をかかえていた。
アズサ……時夜　アズサ……。
めぐる名前はそればり。
アズサ……。
やっぱりオタクを好きになるのはつらい……。
きっとその目は私を向いてはくれないだろう。
周りがざわざわしている中、私は一人でよく過ごすようになった。
もともと私は人とそんなによく話すほうではなかったのもあるけど、アズサや藤堂と話すと苦しかったから。
それだったら傍観者でいいと思ったの。
それでも、藤堂がいるなら、それだけで良かった。
私に初めて……リアルのライバルが、出来た。
「おい、藤崎。」
藤堂に呼ばれて走り出す。
藤堂の顔を見るのが怖い。
もうずっと話してない。
あの顔で、あの声で、彼の全てで、「アズサが彼女になった」なんて聞いたら私は……私は壊れてしまうだろう。
走った先で誰かにぶつかった。

「きゃ！」
相手の子は尻餅をつき、私は手を伸ばした。
「あ、ごめん……。」
「レイ？」
呼ばれて初めてその子を見ると、私の手をしっかりとつかんでいるのはアズサだった。
振りほどいて逃げてしまいたかった。
でも、彼女は私の手をしっかりと握っていて、私に逃げる余裕をくれなかった。
「あ……ずさ……。」
「最近藤堂君と話してないんだって？いきなり避けだしてって藤堂君が言ってたよ。」
「しらな……。」
「くないんでしょ？レイは、本当は藤堂君が好きなんでしょ？だったら何で藤堂君から逃げるの？逃げる必要なんてないじゃん！」
怖いの、怖いの、怖いの！
アズサに私の気持ちなんてわかんない！ずっと藤堂を好きだった私の気持ちなんて！！
「アズサには関係ないよ！」
「あるよ！藤堂君に私が相談受けてる時点で大有りだよ！レイ！本当にどうしちゃったの？レイ！」
私の視線はアズサにしっかりと捕らえられ、逃げることは許されなくなってしまった。
「……怖い……の……怖いんだよ！こんなの気持ち悪いって分かってる！こんなのひねくれてるって分かってる！それでも二次元やアズサみたいに素直になんてなれないんだもん！どうしたらいいかわかんなくて、でも、私……藤堂に嫌われたくなくて……！」
しゃくりあげ始めた私をアズサは優しく慰めてくれた。
いつの間にか私はベンチの上に座ってぼーっとしていた。
「レイは私を素直って言うけど、私は素直じゃないよ。好きな人に

上手く気持ち伝えられなくて、それで辛い思いもして、何度もすれ違って入れ違って、苦しくて、こんなに苦しいならもう恋なんてしないって思ったんだ。」
えへへと笑うアズサの顔に影が落ちた。
「それって、今は藤堂がすきってこと？」
「レイってば、本当に分かりやすいね。藤堂君は気づいてるのかな？レイに。」
「な！何言って！」
私は思わずむせそうになった。するとアズサが背中をさすってくれた。
「前にも言ったよね？確かに私は藤堂君が好きだし、まったく異性としてみてないわけじゃない。けど、恋愛対象ではないよ。」
その瞬間にどこからか“ガサッ”という音がした。
「あれ？なんだったんだろう？誰かいたのかな？」
アズサはのんびりそんなこと言ってるし、私は音の主を気にしてる暇はないし、結局その音がなんだったのかは分からずじまいだった。
それからまた何日かが経ち、藤堂に明らかに元気がないのがわかった。
いきなり避けだしたこともあって、かなり気まずいけどこれ以上元気がなくなるのは心配だ。
「と、藤堂？」
「あ？なんだよ？」
「元気、ないじゃん？どうしたの？」
「ラブ〇ラス〇ラスがもう注文してだいぶ経ってんのにまだこねえんだよ！！もう金だって振り込んであんのに！！俺の人生を～！！」
それを聴いた瞬間にガクッと来た。
くだらないことで落ち込まないで欲しい。
いや、藤堂とかラブ〇ラスファンには重大な事件なのかもしんないけど……。
心配した私がアホらしいじゃないか。

「そんだけ？……聞いて損した……。」
「しかも今週もやもやしてたらけい○ん！も見逃したんだよ！しかも録画もすっかり忘れて、周りに貸してって言ってもＯＰからＥＤまでちゃんと録画してるヤツがいないんだ！これじゃデータ保存ができねぇ！！ＯＰやＥＤの絵が変わったらどうする気だよ！奴らは真のオタクじゃねぇ！！」
普段ならあほらしいと思っただろう。
でも、藤堂がけい○ん！の録画まで撮り逃すなんて変だ。
やっぱり体の調子でもおかしいのかもしれない。
「藤堂！そうじゃなくてさ！藤堂自身に何かあったんじゃないの！？」
「……だからラブ○ラス○ラスとけい○ん！が……」
「それ以外だよ！！」
「……おまえさ、なんなの？俺のこと避けだしたりしたくせにさ、何したいの？」

5．最終話、恋は、実る？

私は息がつまってしまった。
苦しかった。
これは“これ以上俺にかまうな、首を突っ込むな、迷惑だ。”ってこと？
そうだよね……私から勝手に藤堂のこと避けといたのに、自分の都合で根掘り葉掘り聞くなんて……ウザイよね……。
「……なぁ、どうしてそういうときだけ気づくの……？」
「……え……？」
驚いて俯いた顔を上げると藤堂は少し泣きそうなすねたような顔で私から窓へと視線をずらした。
「……お前さ、何で俺のこと避けだしたりしたの？」
素直に藤堂が好きだからとか言える分けない……。
避けだしたけど……それは、アズサと藤堂を見てるのが苦しかったからで……それも言える分けない……。
「……避けだした……んじゃない！ただ……私、おじゃまかなぁって。」
ちょっと無理やりだけど、焦ったように笑って見せると、藤堂はチラリと私を見てから、つぶやいた。
「何がどうお邪魔だと思ったわけ？」
な……んで、そんなこと……聞くの？
「え……と……アズサと藤堂って……楽しそうに話してた……から……。」
「……俺、そんなにわかりやすい？」
その言葉に私は固まった……。
「……え……？」
私は今、どんな顔をしているだろう？
「そんなにもろ分かりだった？」

「……ど……ゆ……こと？」
「俺が、時夜を好きって、そんなに分かりやすかったか？お前に気を使わせるくらい……。」
私は固まってしまった。
“終わった”その瞬間頭をよぎった言葉だった。
でも、いつもどおりに振舞わなきゃ……じゃなきゃ、変……だよね。
「あ、あたりまえじゃん！そんなのモロ分かりだったよ！気づいてないの本人だけじゃないの！？というか、リアルに興味ない藤堂の癖に恋愛とか生意気すぎるんだよ！！」
バシッと背中を叩いて笑って見せた。
「いって！バカ！！」
バカだよ……私、本当にバカだよ……何してるの？
「早く告っちゃいなよ！！」
私は腕組みをしながら言った。
苦しかった。
……同時に私は汚かった。
アズサが藤堂と付き合うことはないと知っていて藤堂に告白させてアズサのこと早くあきらめさせようとしていた。
汚い……なんて汚いんだろう……私……。
「ダメだ……ダメなんだよ。」
藤堂の表情が暗くなった。
「……何……が、ダメなの？」
「……聞いちゃったんだよ、俺……聞いちゃったんだ。時夜が俺のこと、恋愛対象に見てくれないって……誰かと一緒にいたのかはわかんないけど、声だけ聞こえたんだ。」
私はついに追い詰められた。
それを聞いたのは私で、そのシーンだけ聞いたのが……藤堂だった？
じゃああのガサッていう音は……藤堂の……？
そんな都合のいいことあっていいの！？
都合が……よくないか……それを知っても藤堂は……アズサのこと

好きなんだもんね……。
私じゃ、もう……邪魔しきれないくらい藤堂は、アズサのこと好きなんだもんね……。
「が、がんばんなよ……藤堂！アズサだって、きっとこれから藤堂のこと好きになってくれるよ！！だから……そんな悲しそうな顔してないで、さ！！」
私は、何を言ってるの？
なんで笑ってるの？これじゃ、私がアズサと藤堂を応援してるみたいじゃん……。
「……ねぇよ……。」
「……じゃあ、あきらめなよ！わけわかんないよ！なんであきらめられなくてうじうじしてるのに、もしかしたらって、ホントはどっかで思っちゃってるくせに、無いって、ありえないって、言い切れんの！？」
その言葉は、私が私にずっと言いたかった言葉だった。
私は藤堂を通して自分に言葉を発していた。
ずるい……他人にこんなこと言えちゃうのに、自分は告白すら出来ないで、そんな勇気すらないのに他人には言えちゃうんだ。
そうだよ、私はホントはもしかしたらって期待してた。
でも、二次元にかなうわけないって、でも今度はアズサにかなうわけないって思ってる。
結局私だって逃げてるだけなのに、私は、ずるい……。
「……はは、だな、そーなのかも。」
藤堂はそういって笑った。
あれ？どうしてだろう、私、絶対に藤堂の恋の応援なんか出来ないはずなのに……藤堂が元気になるなら、それでもいいのかもって思ってる……。
「がんばれ！私、藤堂（あんた）のしけた顔見てるのはイヤだからね！！こっちまで気が滅入っちゃう！！」
私は、やっぱりずるいですか？

あきらめられない気持ちを隠して、それでも藤堂の……こいつのそばにいようとする私は、ずるいですか？
それでも藤堂の元気はどんどんなくなっていく。
話を聞くところ、アズサに無視されている気がするとのことだった。
「そんなことないよ！向こうから話しかけてきてくれたりするんでしょ！？」
「……でも、よそよそしい。最近ただの連絡みたいなのばっかだ。ダメなのか……もう。応援してくれたお前には悪いけどさ……もう、無理だよ。」
そうよ、あきらめちゃえば良い。
私は本当はずっとこの時を望んでたんでしょ？
あきらめさせてやれば良い。
私だけの藤堂に戻ってしまえば良い。
だけど……。
「無理とか言ってあきらめていいわけないじゃん！！あきらめる前にアズサに告白しなよ！それでふられたときに吹っ切れればいいでしょ！？たった0．1パーセントでも残ってるかもしれないんでしょ！？ふられてないんだから0じゃないでしょ！？その残ってる可能性にもかけもしないであきらめるな！バカ！！」
私は、何を言ってるの？
「……お前に何が分かるんだよ！避けられてる苦しみがわかんのかよ！？」
「……わかんないよ……わかんないよ！分かる分けない！でも、私だってアンタみたいに苦しいよ！」
ちょ、ちょっとまって……？私、何を言おうとしてるの？
「……は？」
「人の気も知らないで、応援しろって、そりゃ無いんじゃない！？って思った！でも、それでもよかった！元気のない藤堂見てるよりずっと、笑ってるあんたのほうが好きだったから！！私は！私は……藤堂(あんた)が……好きだから……。」

藤堂の顔は一瞬蒼白になった。
それから真っ赤になって、慌て始めた。
「ちょ、まって！お前、何言ってんの！？」
分かってた。こうなることは……コイツは私のこと気づいてないって。
私は恋愛に興味が無いやつみたいに振舞ってたし、藤堂のそばで話してないとき以外にガン見してることもなかった。
恥ずかしすぎて、ガン見なんて出来なかった。
それでも、目を細めて笑う藤堂は好きだった。
その笑顔だけは私が独占してしまいたかった。
「……藤堂の馬鹿野郎……言うつもりなんて、なかったのに……。」
泣いてしまいたかった。
でも、まだそれは許されない。
私が許さない。
藤堂の前で泣いて、涙で藤堂を引き止めるようなそんな女に私はなりたくなかった。
それが今できる、精一杯の強がりで、藤堂への私の本気の気持ちだった。
「……マジで……？」
私は顔を思い切って上げた。
それから、藤堂を怒った。
「私はこうなるって分かってた！それでもあんたに言った！それなのにアンタはまだ傷つくのが怖いからって逃げるの！？もしかしたらの1パーセントにもかけないでやめるの！？」
すると、藤堂はいつにない男らしい顔で、何かを決心したような顔で「藤崎、ごめん！」と言って走り去っていった。
行け、バカ……。
残された私はただ、そこで、誰が見てるとか関係なく泣いた。
大声で泣いても平気な場所だったのは不幸中の幸いだったのかも。
それとも、神様がいるなら、神様の思し召しってヤツなのかも。

誰かが私に思いっきり泣けって言ってて、こうなることを知ってたのかも。
私は最初、本当に恋愛に興味がなかった。
だからって二次元に興味あったわけじゃないけど、恋愛とか、どっかでばかばかしいと思ってて、そんな私だから一匹狼になっちゃってて。
でも、そんな私に藤堂が話しかけてくれて、私の生活は一気に色づいて変わっていって……。
ああ、私ってこんなに大声で泣き叫べるほど、本当に藤堂が好きなんだなぁって思えた――…・・。
藤堂、ありがとう、私に話しかけてくれて。
私に、初めての恋を教えてくれて――…・・。

翌朝、”藤堂に会うの気まずいなぁ”とか思っていたら、どんよりとしてる藤堂に会って思わず笑ってしまった。
「藤堂、ふられっちゃったのか！」
「笑ってんじゃねーよ！お前からしたら嬉しいかもしれねぇけどな！！」
「おう！嬉しいよ！これからどっちが先に両想いになるか、勝負だね！！」
「はっ、負けねぇし！」
「は！？負けろし！！」
こうやって、お互いの気持ち知って、バカ騒ぎやってるのもいいのかもしれないね――……？

5．最終話、恋は、実る？（後書き）

最終話でした。読んでくださった読者の皆様、ありがとうございます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8393m/

オタクは好きになっちゃダメッ！！～私、オタクを好きになってしまいました

2011年10月5日13時48分発行